

大豆の狭畦密播栽培技術導入による安定生産

東近江農業農村振興事務所農産普及課

【普及活動のねらい・対象】

近江八幡市では、平成20年の大豆栽培面積は378haで、その39%に当たる149haで無培土・狭畦密播栽培(以下、狭畦密播栽培)が行われました。本栽培法は大豆300A技術に位置づけられ、単収の向上と省力化が可能な技術とされています。このことから栽培面積が大きい認定農業者や特定農業団体が積極的に技術導入を進めてきましたが、倒伏や蔓化、青立ち、雑草繁茂などで単収が低下し、収穫時の雑草抜き取りで作業時間が増加するなどの問題も発生しました。そこで当課では、白王町と長田町の両営農組織に対してこれらの問題を解決するため、通常栽培と同等の単収と品質を確保するための技術実証を行いました。

【普及活動の成果】

(1) 雑草対策

狭畦密播栽培では中耕培土による雑草抑制ができないので、播種後の除草剤の効果を高めるため、地表の砕土を丁寧に行うように提案しました。また、排水性が良好な長田町では、雑草の種子量を減らすため、播種前に複数回耕耘を実施しました。

(2) 湿害対策

大豆の播種は、梅雨時期に行うために苗立ちや初期生育は降雨による湿害の影響を受けやすくなります。これを軽減するため、地下の亀裂を維持して排水性を改善するために可能な限り浅耕としました。

(3) 蔓化・倒伏対策

播種時期が早かったり、窒素成分の施肥量が多いと蔓化や倒伏を助長します。このことから、播種時期は7月10日頃、基肥は窒素無施用としました。

(4) 青立ち対策

青成ちは開花期の干ばつによる着莢数の減少と虫害等による子実肥大停止・腐敗が主な原因と考えられています。今年は、干ばつ害が開花期には発生しませんでした。子実肥大期の9月上旬に長田町で発生し始めたため、畝間かん水を助言しました。一方、白王町では子実害虫の発生が急増したため、9月下旬に防除を指導しました。

(5) 指導成果

7月15日までに播種できたほ場では、湿害や蔓化、青成ちは発生せず、地域単収を概ね達成できました。しかし降雨によって8月5日頃まで遅れた一部のほ場では、草丈が短く、台風による倒伏害も重なり収穫皆無状態となりました。

(6) 今後の課題

狭畦密播栽培は、省力化を期待して品種や播種可能期間、播種密度、雑草対策等の検討が十分にされないまま導入される事例がみられます。今後、地域の栽培情報を収集し関係機関と検討を重ねて、安定した技術として狭畦密播栽培を確立し、大豆栽培の省力化と安定多収を目指します。



狭畦密播栽培の播種作業

水田農業等における産地づくりと売れる農産物の生産・流通による滋賀ブランドの確立に向けた取り組みの促進